

## 一人ひとりの自立をめざした学級づくり

### I 主題設定の理由

社会生活の激しい変化の中で、子どもの生活様式や生活の意識も大きく変わってきた。現代の子どもたちは、自己の利害や損得に関わるものには敏感に反応するが、人とのつながり、思いやりの心という面では希薄になってきているように感じる。いわゆる自己中心的な考え方が強く、自分さえよければよいといった風潮があり、他者を省みない傾向がある。様々な学習や生活の場面でコミュニケーションの能力が課題としてあげられることが多いのはそのような現状があるからであろう。そして、「学級崩壊」「いじめ」「不登校」など様々な大きな課題にもつながっている。

学校での「学び」の基本は、学級集団にある。一人ひとりの子どもが仲間として、お互いに認められ、楽しく生活していけるような「居心地の良い集団」づくりが大事である。居心地のよい集団、すなわち「一人ひとりが認められる学級」にしていくためには、学級の一員としての意識を一人ひとりに持たせたり、自分を取り巻く友だちとの関わりに目を向けさせたり、また学級集団をよりよくしていこうとする気持ちを育てていったりしなくてはならない。

そこで、本部会では、「一人ひとりの自立をめざした学級づくり」を主題とし、子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だてについて研究をし、日々の実践に生かしていきたいと考えた。

### II 研究の内容

#### 1 研究の方法

- (1) 各個人の取り組みや実践を発表し、研究討議をする。

〈レポートの例〉

特別活動の充実、学級会の進め方、班長指導、朝の会・帰りの会の進め方、係活動、構成的グループエンカウンター、課題解決の手だてなど学年の発達段階や各クラスの実態に応じた「自立をめざした学級づくりの手だて」について。

- (2) 講師を招き、「一人ひとりの自立をめざした学級づくり」についての学習会を行う。
- (3) 授業研究を通して「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」について学習を深める。
- (4) 構成的グループエンカウンターなど、学級づくりに役立つ手だてについての実践的研修を行う。

#### 2 研究の具体的内容

- (1) 第1回研究会  
今年度の研究の方向性の確認・・・研究テーマ、研究方法について
- (2) 第2回研究会  
年間計画についての検討
- (3) 第3回研究会  
・学習会「構成的グループエンカウンターの効果的な活用」  
講師 古屋美智子先生（日川小）
- (4) 第4回研究会 実践発表Ⅱ  
・学級新聞を活用した学級経営（3年）  
・集団を高める活動の工夫（2年）
- (5) 第5回研究会 夏季学習会  
・「一人ひとりの自立をめざした学級づくり」  
～事例をもとに様々な児童への教師の支援のあり方を考える～

講師：横森三男先生（峡東教育事務所スクールソーシャルワーカー）

- ・授業案検討会
- (6) 第6回研究会 授業研究①
  - ・友だちの良さを発見する係活動
  - 道徳「はたらく楽しさ」（2年）
- (7) 第7回研究会 実践発表Ⅳ
  - ・保護者会で行うエンカウンター（1年）
  - ・よりよい学級づくりをめざしたリーダーの育成（4年）
  - ・一人ひとりが認めあう学級集団づくり（4年）
- (8) 第8回研究会 実践発表Ⅴ
  - ・目標作りから意識した学級作り（5年）
  - ・友だちを思いやり認め合う学級作り（2年）
- (9) 第9回研究会 授業研究②
  - ・個の成長を促す学級活動
  - 学級活動「2月のおたん生会をしよう」（3年）
- (10) 第10回研究会 実践発表Ⅵ
  - ・学校のきまりを全校で・・・きまりを意識した集団づくり（3年）
  - ・小集団の活用（6年）

### III 成果と課題

#### 1 成果

- ・「一人ひとりの自立を目指した学級づくり」のテーマに基づき、部員が実践を報告し合うことは、工夫されたすばらしい取り組みを学ぶ機会となり、よりよい学級づくりを考えていく上で大変参考になった。
- ・各校の実践レポートは、日々の様々な生活場面で活用できるものもあり、自校の実践に取り入れることができた。日々の悩みを共有できたり相談できたことも有意義だった。
- ・構成的グループエンカウンターの学習会もわかりやすい内容でよかったと思う。日常の取り組みの中にエンカウンターを効果的に取り入れることは、子どもたちの人間関係づくりに有効だった。
- ・夏季学習会では、教育相談や特別支援的な子どもを抱えた時の学校体制づくりや専門の方への相談の仕方がとてもよくわかった。自分一人や校内のみで解決しようとせず、外部の専門機関へつなげることも有効且つ必要であることを感じた。
- ・人数が少なかったが、全員で課題について話し合えたことは有意義だった。
- ・学級経営をする上で、一人ひとりの子どもの居場所を見つけてあげることがとても大切なことだと感じている。内容が目の前の子どもたちに合っており、とても勉強になった。本テーマもとてもよかった。
- ・ほぼ100%の参加でよい部会だった。魅力ある部会になった。

#### 2 課題

- ・部員の人数が昨年より少なくなっているため、全体で討議する場面が多かったが、より有意義な研究会となるよう、その内容や方法に工夫を加えていきたい。
- ・授業研究では、授業者が今後の指導に生かしたり、県教研のレポート作成の参考にしてもらうため、参観者が子どもの発言をできるだけ詳細に記録してはどうか。
- ・実践が読む側にもわかりやすく伝わるレポートの書き方を工夫することで、いっそう有意義なものになると思う。
- ・自治的という話し合い活動、グループエンカウンター、集会活動などほとんど学級活動の実践になってしまうが、教科・道徳・総合的な学習の時間でも自治的な活動が仕組めるのではないかと。様々な場面からのアプローチをしていくとよいのではないかと。
- ・県教研の共同研究者の話の中であつたように一人の児童に焦点をあて、指導とその変容を記録のようにまとめて実践発表をするとよいと思った。
- ・研究授業の授業案検討は、できる範囲で行えるとよい。全体で検討できる時期が限られてしまうが、大勢で意見交換できると授業づくりに生かせのではないかと。

（部長 鈴木百合子）